

令和元年6月19日現在

機関番号：13301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K18166

研究課題名(和文)競争市場構造分析を用いた大型クルーズ客船の寄港要因の解明とクルーズ観光政策の支援

研究課題名(英文)Elucidation of call arrival factors of a large cruise ship using competitive market structure analysis and support of cruise tourism policy

研究代表者

藤生 慎(FUJII, MAKOTO)

金沢大学・地球社会基盤学系・准教授

研究者番号：90708124

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：近年、日本国内においてクルーズ船の寄港回数およびクルーズ人口が増加傾向にある。クルーズ客に関する研究は、寄港地における「消費行動」や「満足度」を把握する調査や、「観光行動」を分析する研究がこれまでなされてはいるが、両者が結びついた分析が行われていない。本研究では、クルーズ客の方を対象に行ったアンケート調査のデータを用いて、訪れた訪問地や滞在時間を変数としてクルーズ客の観光行動パターンを類型化し、その違いによって消費額や観光満足度、再訪意思がどの程度異なるのかを検証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

近年堅調の増加しているクルーズ船の受け入れに際して、時間制約型の観光形態であるクルーズ観光のさらなる増加に向けて多種多様な調査を実施した。その結果、クルーズ旅客の満足度、そわそわ度、回遊度と消費の関係性を明らかにした。その結果、効果的なクルーズ受け入れ態勢の構築に向けて大きな知見をもたらした。

研究成果の概要(英文)：In recent years, the number of cruise ship calls and cruise population have been increasing in Japan. Research on cruise passengers has been conducted to find out "consumption behavior" and "satisfaction" at the port of call, and studies to analyze "tourism behavior" have been conducted so far, but an analysis in which the two are linked is conducted. Absent. In this study, using the data of the questionnaire survey conducted for cruise passengers, the tourist behavior pattern of cruise customers is classified as a variable with the visited site and stay time, and the difference between the amount of consumption and the degree of satisfaction, We examined how different the revisiting intentions are.

研究分野：交通計画

キーワード：クルーズ観光 外国人観光客 消費 動態 満足度 そわそわ度

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

「観光立国実現に向けたアクション・プログラム 2014」では 2020 年に「クルーズ 100 万人時代」の実現が目指されたが、その目標が翌年 2015 年に 5 年間の前倒しで達成されたため、「明日の日本を支える観光ビジョン」にて 2020 年の訪日クルーズ旅客数を 500 万人とする目標が改めて掲げられた。さらに 2018 年 1 月 16 日公開の国土交通省による速報値によると 2017 年の訪日クルーズ旅客数は前年比 27.2%増の 253.3 万人、クルーズ船の寄港回数は前年比 37.1%増の 2765 回を記録しており、いずれも過去最高である。近年の推移を見ても、堅調にこれらの数字は上昇しており、今後もクルーズ観光の発展が十分に期待できると言える。クルーズ旅客と乗組員らによる消費活動により、寄港地とその後背圏に、乗船者 1 人当たり 1 万～6 万円ほど、クルーズ船 1 隻あたりの寄港で数千万円から数億円の経済効果が及んでいることが報告されている。我が国の経済を考える上でクルーズ観光への期待度は非常に高いと言える。このような背景を受け、今後の日本の経済対策の一環としてクルーズ船を受け入れる港の港湾施設の整備・増強が内閣府により提案され、港湾整備費として 2317 億円が割り当てられるなど⁵⁾、クルーズ船を受け入れる環境をハード面において強化する取り組みが行われている。また、青森県⁶⁾や国土交通省⁷⁾によりクルーズ客に関する観光の実態調査が行われており、クルーズ客の観光行動の実態把握を試みる動きも国内で多く見受けられる。

2. 研究の目的

寄港地でのクルーズ客の観光実態を把握するべく、様々な調査が国内で行われているが、それらの調査の多くは大型の船舶が就航した時にのみ行われているため、様々な船舶を対象として大規模かつ継続的に調査を行った事例は存在していないことが課題となっている。また、寄港地となる都市ごとにそれぞれ観光形態が異なり、ツアー客とそうでない客との違いや、クルーズ船にも様々な種類が存在しグレードや総トン数、航路や日数などがそれぞれ異なるなど、「クルーズ観光」は様々な要素が複雑に絡み合っているためそれらすべてを考慮した網羅的な把握がなされていない。また、国土交通省や各自治体が行っている調査に関しては基礎集計の段階にとどまっているものがほとんどであるため、クルーズ客らの表面的な部分しか明らかになっておらず、多変量解析等による統計的根拠に基づいて彼らの観光特性を評価した事例は存在していないのが現状である。本研究では、近年クルーズ船の寄港回数が堅調に増加している金沢港に着目し、訪れたクルーズ客を対象としたアンケート調査を行った。どのような人が、どのような観光をしてどのような満足度になり消費を行うのか、「満足度」「動態」「消費額」の観点でアプローチし、まだ明らかにされていない潜在的な観光特性の把握を行う。本研究によるクルーズ客の実態把握を通して、クルーズ船を誘致する寄港地に対する観光まちづくりの提案・提言を行うことを目的とする。

3. 研究の方法

本研究で実施したアンケート調査の取得サンプル数（アンケートの回収枚数）を示す。調査は 2016 年度から 2018 年度の 3 か年で実施し、合計で 6201 枚のアンケートを回収することが出来た。また、クルーズ船の寄港の仕方によって、乗客は大きく 2 種類に分けられる。まず、他の港から乗船し、金沢へは一時上陸し観光する乗客（一時上陸客）である。このような乗客は寄港地での観光をする際、船の停泊時間による時間制限を受けるため、一般観光客よりも短時間で観光をすることが考えられる。もう一つの乗客タイプは、金沢港発着クルーズにて、金沢港からクルーズに乗船する乗客（乗下船客）である。このような乗客は、主に金沢周辺在住でクルーズ乗船前後は金沢市内での買い物をする期待は低い。一方で、金沢在住でなく遠方からやってくる方のクルーズ乗船前の前泊・後泊が期待できるという特徴がある。金沢港へは、2016 年度に 10 回寄港したコスタ・ピクトリアと、2017 年に 32 回、2018 年に 12 回寄港したコスタ・ネオロマンチカは、定期クルーズとして運行されており、一時上陸客と乗下船客の両方が存在したクルーズとなっている。なお、(社)金沢港振興協会の報告によると、金沢港における定期クルーズにおいては一時上陸客と乗下船客の割合はおおよそ、6:4 となっていることが分かっている。金沢一時上陸の乗客に対しては、港にてあらかじめ長机と椅子を用意し、観光を終え金沢港へ戻ってくる乗客を対象としてアンケートをお願いした。金沢乗船の乗客に対しては、クルーズ旅行が終了し金沢港で下船する時に切手（または料金後納郵便）付きの封筒を添えたアンケートを配布し、回答済みのアンケートを後日郵送にて回収した。どちらの乗客タイプも、アンケートをお願いする際に粗品として扇子や和紙、ウェットティッシュを配布した。

4. 研究成果

近年、日本国内においてクルーズ船の寄港回数およびクルーズ人口が増加傾向にある。クルーズ客に関する研究は、寄港地における「消費行動」や「満足度」を把握する調査や、「観光行動」を分析する研究がこれまでなされてはいるが、両者が結びついた分析が行われていない。本研究では、クルーズ客の方を対象に行ったアンケート調査のデータを用いて、訪れた訪問地や滞在時間を変数としてクルーズ客の観光行動パターンを類型化し、その違いによって消費額や観光満足度、再訪意思がどの程度異なるのかを検証した。

5. 主な発表論文等

- 1)藤生慎, 吉岡正博, 大澤脩司, 横山慶典, 坂尻昇太, 久保光夫, 中山晶一郎, 高山純一, 高田和幸: 港と観光地を結ぶシャトルバスの運賃モデルの推定(日本クルーズ&フェリー学会論文集第5号, 19-27)
- 2)藤生慎, 吉岡正博, 大澤脩司, 横山慶典, 坂尻昇太, 久保光夫, 中山晶一郎, 高山純一, 高田和幸: クルーズ旅客のリピー観光要因の分析(日本クルーズ&フェリー学会論文集第5号, 28-36)
- 3)藤生慎, 吉岡正博, 大澤脩司, 横山慶典, 坂尻昇太, 久保光夫, 中山晶一郎, 高山純一, 高田和幸: ライフログカメラ・GPS ロガーを用いた観光行動分析(日本クルーズ&フェリー学会論文集第5号, 46-54)
- 4)藤生慎, 大澤脩司, 松田耕司, 中山晶一郎, 高山純一: Wi-Fi 環境に対するクルーズ関係者の意識調査~金沢港に寄港したクルーズ旅客・船員を対象として~(日本クルーズ&フェリー学会論文集第7号, 20-28)
- 5)藤生慎, 松田耕司, 高山純一, 大西遼, 高田和幸, 南貴大, 森崎裕磨: クルーズ乗船に好まれる季節および時期の特性に関する一考察~金沢港における乗下船者を対象として~(日本クルーズ&フェリー学会論文集第8号, 19-27)
- 6)大澤脩司, 藤生慎, 松田耕司, 寒河江雅彦, 鶴田靖人, 高山純一, 中山晶一郎: GPS ロガーを用いたクルーズ旅客の観光行動分析手法に関する研究(日本クルーズ&フェリー学会論文集第8号, 28-41)
- 7)大澤脩司, 藤生慎, 小橋川嘉樹: Wi-Fi パケットセンサによる観光行動把握の試み~クルーズ旅客と一般観光客の行動比較に向けて~(日本クルーズ&フェリー学会論文集第8号, 42-51)

〔雑誌論文〕(計9件)

〔学会発表〕(計10件)

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年:
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年:
国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名:

ローマ字氏名:

所属研究機関名:

部局名:

職名:

研究者番号（8桁）:

(2)研究協力者

研究協力者氏名:

ローマ字氏名:

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。